新しい英雄とその仲間達

愛福

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新しい英雄とその仲間達

【Ｎコード】
Ｎ２５２４Ｖ

【作者名】
愛福

【あらすじ】
ヘタリア二次創作です。
中世ヨーロッパ風物語です。

むかしむかしのおはなし（前書き）

注意！
ヘタレが全くヘタレではありません。
台詞がくさかったりする
子供のルートが出てくる
方言などが違ったりする
すごくありきたりで先が読める
菊よりずいぶん先にギルベルトが出てくる惨事
実在の団体、政府、軍などには全く関係ありません。
以上を読んで、それでもＯＫ！読んでやろうじゃないかっていう強者の方だけお進みください。

むかしむかしのおはなし

むかしむかしあるところにとてもかわいい双子の男の子がいました
兄のほうはつんつんしているし　やたらとつかっかてくるのであまり好かれていません
でしたが、弟のほうはとても素直でみんなに好かれていました。
兄の名前はロヴィーノ　ヴァルガス
弟の名前はフェリシアーノ　ヴァルガス
といいました。

彼らの一族は昔から不思議な力がそなわっていました。
正しく使えばとてもゆういぎに
使えなければ自らの身だけではなく周りの者も滅ぼすとても恐ろしい力でした。

彼らの手首には力を制御する為のリングがそれぞれ小さい頃からはめられていました

ロヴィーノのリングは黒く月のレリーフが
フェリシアーノのリングは白く太陽のレリーフがそれぞれ彫られていました

彼らのお爺ちゃんは昔力を使い革命を起こし国を正しい方向へと導きました。

しかし彼らの父は力を自分の欲望の赴くままに使い危うく国を滅ぼ

すところでした

そんな惨事はもう二度と起こさぬよう二人は幼い頃から力を使いこなせるようにお爺ちゃんから厳しい訓練を施されさらに

「力はめったなことでは使ってはいけない」

「本当に困ったときや殺されそうになるまでリングをはずすな」

と厳しく言われていました

むかしむかしのおはなし（後書き）

なんたることでしょう。こんなのを投稿してしまいました。作者としては菊を早く出したいのですが、ごめんなさい、まだそこまでかいてないんです。

こんなん読まなければよかったぞちくしょー！って方は作者のジャンピング土下座でゆるしてください。

出会い（前書き）

がんばりましたぜ！
前の前書きをよく読んでからお読みになってください。

出会い

双子は街にでて買い物をしようということになりました

理由は明日のご飯はパスタにしようとおもいましたが小麦粉が足りなかったため。

フェリシアーノがお肉屋さんとしつこく値段交渉を頑張っていたところロヴィーノは薄情にも

「あっあそこにかわいいベッラがいる！俺ちょっとナンパしてくるわ！」

と、どこかへ行ってしまった。

「はぁ～。」

お兄ちゃんどっかいっちゃったしどうしようかな～

どうやらフェリシアーノは迷ってしまったよう。

あれからしつこくがんばってみたのですが結局お肉の値段は三十円下がっただけ。

「おらおら金、あるんだろ？だせよ！」

なにやら路地裏が騒がしい。首を突っ込むのは危ないと思ったが、誰かを殴ったりする音がするので気になり行ってみることにした。

ひょこりと顔を覗かせてみるとそこでは金髪青い瞳の自分とおなじくらいの歳の男の子が大柄な男たちに囲まれているところで。

（うわーリンチかー。あの男の子すでにぼろぼろじゃん。助けてあげないと。）
そう思ったフェリシアーノは、
「なにやってるの？」
と助け船を出した。
フェリシアーノが屈強な男たちにたずねると、
「あん？なんだこの・・・。こいつの仲間か？おいお前ら、やっちまえ！」
と、そのなかでも特にごつい男が仲間に指示をだした。
「おじさん、僕とやる気？やめておいた方がいいと思うけど」
フェリシアーノはいつものヘタレな口調でいいきりました。
（これくらいならリングを外さなくてもいけるな～）
ある程度の力なら制御リングをはずさなくても使う事ができます。
それに、お爺ちゃんに教えてもらった体術も最近はあまりやっていませんが腕はおちていないはずです。

それからはあっという間でした。
金色の光が瞳からほとばしったかと思ったら次の瞬間にはほぼ全員が倒れていました。かろうじて立っているのはあのボス格の男だけでした。
（やっぱこれだけあいてにするのは無理があったかな・・・。ほかの奴らも気絶してるだけみたいだし。）
「おっお前、まさかあの力のもちぬｓ　ごふぅ！！」

フェリシアーノが繰り出した拳はあざやかに男の鳩尾にきまっていた。
くずれおちる男。それを冷ややかな目で見つめつつフェリシアーノは男の子に尋ねました。

「君、名前は？」
　男の子は、少し怯えながらも、
「ルート。」
　とはっきりと言いました。
「あなたは？」
「俺？俺は、フェリシアーノっていうんだ。ところで、君の家は？夜も遅いから、俺、送っていくよ。」
「っ！いい。送らなくてもいい。」
　「え～～あぶないよ～送ってくって～」
「いいといっているだろう！」
「でも、もうおそいよ？」
「？？？帰りたくないんだ。」
「え？」
「家出してきた」
「なら、うちにくるといいよ！ちょうどお爺ちゃんいないし！」
「？？？っ！いいのか？」
うん！とうなずくとルートはとても嬉しそうな顔をした

出会い（後書き）

うわーベタだよー
しかもフェリが強すぎるよー
何この勝手のいい設定は。
ずいぶん前から書きためているので初期の私がどんなにヘタだったか。
ちなみに、荒らしとかやめてくださいね。
心が折れると思うので。
それか徹底的にスルーするか。
（たぶん前者の方が確率が高い）
それでは！

出会い　パート2（前書き）

今回ちょっと短いかもです

出会い　パート2

で、とりあえず家に帰ったのはいいのですが。
「なんなんだこのガキは？」
ナンパに失敗してすごく不機嫌のロヴィーノが待ちかまえていました。

「？？？？？かくかくしかじかで、今夜は泊めてあげようと思うんだけど。」

「あん？知らねーよそんなもん。それより腹が減った。お前小麦粉持ってたよな。」
と言って勝手にパスタを作り始めてしまいました。

「兄ちゃん、俺も手伝うよ。ルートも手伝って！」
といいましたが、ルートはつっ立ったままです。

「どうしたの？」

「いや、すまん。キッチンに、立ったことがないのでな。なにをどうやったらいいのかさっぱりわからん」

えっマジで？；
「じ、じゃあ、そこら辺に座っててて」

「うむ、そうさせていただく」

険しい顔でこちらを見ていたロヴィーノが作業に戻ったフェリシアーノに対し、一言、

「あいつ？？？結構身分が高いかもしれねーな」
「え」

「だって見ろよ。あいつ、字が読めるみたいだしよ。立ち振る舞いもいいし、おまけに一度もキッチンに立ったことがないときてる。こいつは名門貴族の出身かさしずめ王族ってとこだな。」

言われてみるとそうかもしれません。でも、仮に貴族の子だったとしたら、あんな下町にいるのは、おかしいことです。

「ま、まあ、一晩ぐらいならいいでしょ？」
「べつにいいが？？？？」
というとロヴィーノは苦い顔をしました。

「すみつくことにならねーなら、俺は別にかまわねえよ。」
くるり、と背中を向けるとパスタの盛りつけに戻っていきました

出会い　パート2（後書き）

やっぱり短い・・・。
いきなりプラグたてちゃったよ。
ちなみにギルのみぶんはもっとすごくなる予定です

それで。（前書き）

お久しぶりです。亀ですね。今回ちょっと長いかもしれません。
例によって、注意書きをよく読んでね☆

それで。

「できた～！」
できたてほやほやのパスタを机に置くと、ルートは、驚いたことに食べる気配がありません。
「なんでたべないの～？」

「？？？？」

「おいしいのに～」

「？？？？？？これは、なんだ？」

「？パスタだよ～？？たべたことないの～？」

「初めて見た。いつもは、じゃがいもとか、ヴルストとか、そんなものしか食べないしな。」

「へ～～。」

「？？？？？？うん、食べてみたら結構おいしいな。」

「でしょでしょ～～。」

しかし、パスタを食べたことがないなんて～兄ちゃんの言ってる事、当たってるかも～
ま、いっかぁ～と、軽く流すフェリシアーノでしたが、一つ気になることがありました。

「ねえ、ルートはどこに住んでるの？」
「！あ、ああ、まあ、普通のところだ。召使いがいて、馬がいて、？？？まあそんなところだ。」

それは普通って言わないよ！；

「おらぁフェリシアーノ、なにさぼってるんだ。食器は俺が片付けておいてやるからお前はさっさと布団敷いて、とっとと寝やがれ！」
「う、うん。」

そして、フェリシアーノはベッドの中でルートに再度聞きました。

「ルートがすんでるのはどこらへんなの～？」

「エウエリオス地方だ」

エウエリオスとは、この国で一番の市街地で、貴族や高級官僚が軒を連ねる住宅街です。
さらにそこには国会議事堂や王宮なんかもあり、政治の中心部でした。

「ほんと～？すごいじゃん～」

「？？？？？フェリシアーノたちのお爺さんはどんな人なんだ？」

「えぇ～っとね～俺たちのお爺ちゃんは、あの大英雄のヴァルガスなんだよ～」

「っ！あの？？？。ああ、その力は英雄からの遺伝なのか。納得した。」
ルートは何故か苦い顔をしました。
「それから～」
「おいこらてめえ、さっさと寝ろって言っただろ！うるせえ」
「う、うん～。じゃあおやすみ～」
そういうと、フェリシアーノはとたんに寝息をたてはじめました。
ちからをつかうと、精神力を消耗するのでどうしてもねむくなってしまうのです。
「ん。ああ、おやすみ。」
ルートも、疲れが溜まっていたので、寝ようとしましたが目が冴えてしまってどうしても眠れません。
（やはりもう、でていったほうがいいのか・・・・）
そんなことをとりとめなく考えていたら、突然ロヴィーノに呼ばれました。
「ちょっとこっちに来い。」
（なんだ？？？？・？）
「お前に聞きたいことがいくつかある。」
「・・・？」

「お前の本名を教えろ。」

「だから、ルートだと・・・」

「俺は本名って言ったんだ。まあ、さしずめルートヴィッヒ・バイルシュミットってところか。」

「!!なっ??????なぜそれを!」

「けっあのくそ弟との会話聞いてたら誰でもわかるぜ。まあ、今の反応で確信したけどな。そこまで浮世離れした奴は、王子くらいのもんだ。それに、今の王位継承者は、銀髪赤い瞳のアルビノだって有名だしな。」

「じ、じゃあ????。」

「ああ、あのくそ弟はまだ気づいてないっぽいな。全く、どんだけ鈍いんだよあいつは。」

「では????。」

「ああ、まだ居ていいぞ。ただし、朝までな。ルードヴィッヒ・バイルシュミットっていえば、この国の王位継承権第二位をもってる。いくら飾りだけの王位だって国政に重要なのは変わらない。そんな奴が行方不明になってみろ、いまごろ王宮はてんやわんやの大騒ぎだ。とっくの昔におふれが出てるぜ。まあ、早めに帰るこった。今度は盗賊に引っかからないようにな。」

そういうとロヴィーノはせせら笑った。

「それとも、王家の権利を剥奪した者の孫として、俺らを処刑するか？」

「っ！そんなことはしない。仮にも国が崩壊しそうな時に助けてもらった英雄の孫だ。そんなことをしてみろ、民衆の批判がすごい。」

「まあ、その国が崩壊しそうになった原因をつくったのは、親父だけどな。」

「それに、」

ルートは一呼吸置いてからいいました。

「今の王宮は、人を処刑できる権利を持っていない。あくまでも、告発どまりだ。首相と大臣たちが首を縦に振るわけがないだろう。まあ、先々代の国王がむちゃくちゃで、気分次第で人を殺していた『暴君』だったからな。」

ルートは少し、自虐的に笑いました。

「俺は、その暴君の血を引いているんだ」

「はんっおれなんて、国をいっこぶっ潰そうとした大罪者の息子だぜ？」

「？？？？そうだったな。」

「ふぁぁ～。なんか、もう眠～。俺寝るわ。あと、闇に紛れて帰ろうなんて馬鹿なこと考えるなよ。ここの森は夜になると熊とか、猪とか、うじゃうじゃいるぜ。」

「それは、遠慮したいな。」
「あ〜じゃあ、おやすみ。」
「おやすみ。」

それで。（後書き）

え？何これ、こんなに長くなる予定じゃなかったんですけど・・・。すみません。改善した方がいいところや誤字、脱字等ありましたらご報告ください。

その朝（前書き）

短かった・・・。ごめんなさい。

その朝

次の日の朝、決心がついたルートは、フェリシアーノに話を切り出しました。

「昨日、泊めてくれてありがとう。俺は、帰る決心がついたから、もう帰る。」

「もっと泊まっていてくれて構わないよ～？」

「いや、いいんだ。それに、兄さんも心配しているだろうし。」

「そう？？？。」

「でも、本当に、助けてくれてありがとう。？？？？その、」

ルートは顔を赤らめながらいいました。

「フェリシアーノさえよければ、なんだが。」

「なあに～？」

「あのっとっ？？？？？友達になってくれないか？」

「いいよ！」

「そ、そうか。よかった。あ、じゃあ、もう行くな。ありがとう。機会があったら、また会おう。じゃあな！」

「うん、ばいば～い！」

そういうと、ルートは街へ帰っていきました。

（いい友達ができてよかったな～。ルート。また会えるといいな！）

「あ、お爺ちゃん帰ってきた！お帰り～」

その朝（後書き）

友情ごっこって訳じゃないんですよ！

王宮では（前書き）

今回でてきます。だれがって・・・。

普憫が！！

ちなみに国名出ださないです。

王宮では

「あ～、あいつどこ行っちまったんだよ。こんなに国中におふれ出してるってのにまだみつかんねえとか！やっぱり、誘拐されちまったのか？？？？？」

「ギルベルトさま！」

「あ～なんだよ！今俺様の弟が行方不明だっていってんだろ！」

「いえ、それが、？？？？？見つかりました。」

「マジか！何でそれを早くいわねえんだ！」

「今朝、城門の前に来たそうです。、会わせてほしい、と。」

「すぐに通せ！」

「兄さん、すまなかった。」

「まったく、いったい何人の手を煩わせたと思ってんだ。」

「そのことに関しては、どんなお叱りを受けても仕方がないと思ってる。誘拐されたんじゃないから安心してくれ。」

「じゃあ、いったい何だっていうんだよ。」

「家出のつもり、だったんだが？」

「ぷっはははははははははははは！！！！！！！家出っておまえ、ははっはははははったった一日やそこらで帰ってくるやつがあるかよ！！！！！」

「兄さん、笑いすぎだ。俺が言いたいのはそれじゃない。」

「ははははっはははははっいやあ、すまねえ。で、言いたい事ってなんだよ。」

「実は、城を出て行くあてがないから、とりあえず普段行かないところへ行ってみようと思って、ユーラ地方に行ってみたんだ。」

「お、おい、ユーラ地方っていったらこの国で一、二を争う治安の悪い所なんだぞ！お前、正気か？」

「いや、大臣たちも教えてくれなかったのでな。ちょっと行ってみようと思ってな。無知とは怖いものだな。自分には剣の腕もあると、たかをくくっていたんだ。」

「それで？」

「結果はぼろぼろ。気づいたら、男たちに囲まれて、殺されそうになった。」

「なっ！だからあそこには近づくなと言っていただろう！」

「まあ聞いてくれ、兄さん。そこで、ある人物と出会ったんだ。」

「だれだ、それは？」

「大英雄の孫、フェリシアーノだ。」

「マジかよ！お前、運がよかったな！」

「それで、俺は力を使ってもらい、助かった。」

「しかし、王宮の権威を剥奪した者の孫に助けられるとは、王子の風格形無しだな。で、どんな代償を要求された？」

「いや。何も要求されなかった。むしろ、俺を王子だと気づいていなかったようだ。」

「ははは！どんだけ鈍感なんだよそいつ！」

「まあ、もう一人の孫のロヴィーノの方には気づかれてしまったようだがな。そして、しっかりと釘を刺されてしまった。兄さんが心配しているだろうから、はやくかえれってな。」

「心配したってのは本当だな。お前がいなくなったって知って、慌てて国中におふれを出したんだぜ。」

「それで、帰ってきた。もう気が済んだから、どんな罰を受けても構わない。」

「おいおい、お前、なんか勘違いしてねーか？こんなかわいい弟に罰を与える兄貴がどこの世界にいるってんだよ。」

「！それでは、」

「この件はお咎めなしだ！まあ、俺もちっさい頃・・・」

「なんだ兄さん？」

「いやあ～お前、ここの生活が暇で飛び出したんだろ？俺も暇で暇でしかたなくってよお結構頻繁に家出してたんだぜ？まあ、いつも帰ってきては親父に怒られてたっけな。」

「そ、う、なのか」

「最近はめったにやんなくなったけどよ！ケセセセセセ！！！！」

「あ、では、俺はもう部屋に帰っていいか？」

「え～いいじゃんか、今夜は二人で飲みあかそうぜ！」

「いや、そもそも俺はまだ未成年だぞ！次期国王が安易に法律違反な事を口走っていいのか！？」

「ちぇ～～。」

「それでは失礼する。」

「ルッツ〜〜」

「ああもう！俺はいろいろやり残したことがあるんだ！そんな捨てられた子犬のような目で俺を見ないでくれ！」

そう言い残すと、ルートはギルベルトの部屋から出て行ってしまいました。あとに残ったギルベルトは、

「一人、楽しすぎるぜー！！」

と、寂しく夕食を食べ始めました。

王宮では（後書き）

前回短かった分、長くしました。がんばったです・・・。

数年後。双子。（前書き）

誰か大英雄の名前考えてください・・・。イタリア語の名前で、大昔にあっても、今あってもおかしくない奴・・・。（（殴

我が儘言ってすみません。

数年後。双子。

「やぁっべぇ！！チーズが底ついちまった！確か夕飯、ピッツアだよな！？」

「え～！！兄ちゃん！チーズのないピッツアなんて、麺のないパスタみたいなものじゃん！そんなの俺嫌だ！！」

「う～ん。こうなったとき、対処方法は三つだ。」

「なになに？」

「まず一つめ。ピッツアをつくるのをやめる。」

「え～～でも、お爺ちゃんが食べたいっていってたし～今寝てるけど。」

「あ～～だったらこの案は無しだ。二つめ。チーズを使わないピッツアをつくる。」

「だからそれは、絶対嫌だ！！」

「やっぱ無しか。三つめ。今から根性で街に出て、チーズを買う。でもなぁここら辺獣がいるから、夜あんま外出たくないんだよなぁ。一回出て、獣に半殺しにされて、お爺ちゃんに助けてもらったことあるだろ？」

「うん。それで、あのあとこっぴどく怒られたんだっけ。でも、も

う五年くらい昔の話だし。」
「でも俺は、怖いから無理だぞ。」
「う～～ん。どうしよう・・・あ、そうだぁ！！」
「なんだよ」
「二年くらい前にもらった、あの石つかってみない！？」
「あぁ、あれか。」
「結局何だかわかんなくて使わなかったけど『すごい力を持つ石』なんでしょあれ！」
「あ、ああそうだな。お爺ちゃんが言ってたんだから、よっぽどすごい石か、やばい石なんだな～と思って、しまったまんまなんだが。」
「ん～～あ、あったあった。にいちゃんは？」
「ん、あ俺のもあったぞ。」
「でさ、これで、街まで瞬間移動できたらな～っと。」
「あほかお前。そんなんできたら苦労しねえだろうが。」
「あはは、だよね～」
「いや、できるぞ。」

「あ、お爺ちゃん！」

いつの間に起きたのか、お爺ちゃんは戸口の所に立っていました。

「その石、フェリシアーノが持ってる黒いほうと、ロヴィーノが持ってる白いほうの力を合わせると、いっきに十人くらいの人を瞬間移動させられるんだ！すごくないか？あと、その石にはもっとすごい能力があるんだが・・・・また今度な！」

「え～～気になるよお爺ちゃん～」

「まずは街に行ってチーズ買ってくるのが先だろう。その石に向かって街の行きたい場所を念じる。で、次目を開けたときにはその場所ってわけだ。あ、二人が行きたい所がばらばらだと、うまく発動しないぞ。息をあわせてやれよ」

「じゃあ、兄ちゃん、肉屋と野菜屋の間の路地ね。」

「ああ。」

「じゃあいくよ！」

ブンッ

「よし、無事、移動できたな。そんじゃちょっくらもう一寝入りすっか」

数年後。双子。（後書き）

驚いた。双子にこんな能力（ちから）のある石が渡されてたなんて、作者もびっくりです。

再会（前書き）

がんばりました。いつも見てくださってる皆さん、ありがとうございます。

再会

ブンッ

「おお～すっげえ～ちゃんと出られたよ～兄ちゃん、大丈夫？」

「あっちきしょう！人の真上に乗っかっておきながらなにが『大丈夫？』だよ！危うく潰れる所だったじゃねーか！」

「ごめん兄ちゃん。」

「じゃあ、とっととチーズ買ってとっとと帰るぞ！」

「そうだね～。あ、なんかお祭りやってるみたい～いってみようよ！！！」

「見るだけな。」

「今日、なんかあったっけ？すんごく盛大にやってるけど？」

「今日は、国王の戴冠式だったんだよ。で、ここに国王が来るらしいから、派手に飾り付けてんだ。」

「へえ～そうなんだあ～。あ、国王って、あの銀髪赤い瞳の？」

「ああ。次期国王がアルビノってのもどうなんだって意見があっていろいろもめたらしいが、最終的には変わらなかったらしいぜ。」

「ふう～ん。兄ちゃん、詳しいね。」

「ああ、いろんな所に突っ込んでると、情報がいろいろ入って面白いんだ」

「頼むから、危ないところにはつっこまいでね！？」

「ああ。わかってるって。」

広場の一角でワアアアアッと歓声が上がりました。どうやら国王が到着したようです。

「皆のもの！今日は集まってくれて感謝するぜ！」

見てみると、本当に色素が薄い若者が、広場の中心で手を振っています。

（ああ、あれが国王なんだ）

隣にいる金髪隻眼の若者は、何故かどこかであったことがある気がしましたが、

（俺に王族の知り合いなんているわけないし！）

と打ち消してしまいました。

帰り道。またどこかへ行ってしまったロヴィーノを探しに路地裏へ

入った時でした

「フェリシアーノ！」

（懐かしい声が聞こえた気が、ん？この声は）

「ルート？」

「こっちにくるな！」

「え？」

行ってみると、あの広場にいたむきむきの王子がおとこたちにかこまれていました。

「何で、俺の名前知って？ていうか、誰？」

むきむきの青年は、すらりと剣を抜くと、周りを取り囲んでいる男たちに言い放ちました。

「いいか、お前ら！俺を取り囲むとはいい度胸だ！おれはルートヴィッヒ＝バイルシュミット。この国の騎士にして、第二王子だ！」

「なっ！」

敵が一瞬ひるんだその瞬間！

「はぁ！！」

軽やかな足取りで正確に相手の急所に剣を突き立て、男たちを倒していきます。

一人、また一人。しかし、ルードヴィッヒと名乗った青年にも、少しずつ傷ができていきました。

「くそっ！」

バランスが崩れたそのときに背後から一人の男が襲いかかりました。

「あぶないっ！」

知らず知らずのうちにフェリシアーノは力を使っていました。

ピイイイイイン

闇がそこいらを覆ったと思った次の瞬間

動いているのは青年とフェリシアーノだけでした。

しかし青年も傷まみれでぼろぼろでした。

「また、救われたな。フェリシアーノ。」

その言葉を最後に青年は気を失いました。

再会（後書き）

ごめんなさい！！！ルートが弱いです！！！全力でジャンピング土下座します！！

ほんとうにごめんなさい！（特にドイツファンの方！）

国王登場（前書き）

ギルが来ます。ロヴィーノが敬語使ってるのは曲がりなりにも国王だからです。

国王登場

「あっヴェストじゃねーか！探し、ッて、気絶してやがる」

銀髪赤い瞳の男がやってきて、青年をかかえ上げました。

「国王様！？」

「ん、ああ、こいつ助けてくれたの、お前か？」

「は、い。」

「礼を言うぞ。あー、名前は？」

「フェリシアーノ・ヴァルガスといいます・・・。」

「そうか。あ、前にも弟を助けてくれたことがあるな？ん？」

「え、」

「こいつが話してくれたことがあってよお。あいつが鍛錬に励みだしたのもそのころか。で、こんなむきむきになっちまったんだけどな！」

「あ、じゃあもしかして、、ル、ルート？」

「もしかしなくても、だぜ！ケセセセセセなんだと思ってたんだ」

「い、いやぁ」

そうこうしているうちに、フェリシアーノはまぶたが重くなってきました。寝てはいけない寝てはいけないと思いつつ、やがて耐えられなくなって、寝てしまいました。

「お、おい、寝ちまったのかよ。どうしよう。」

そこへタイミングよくロヴィーノがぶつくさ文句を言いながら現れました。

「あいついったいどこへいってんだよ！みつからねえぞちくしょ～」

「お前の弟ならここにいるぞ。」

「あ～ありがとうございました。って、こ、国王様！？失礼いたしました。」

「そんなにかしこまらなくてもいいぞ。今はお忍びでパーティを抜けてきたんだ。」

「し、しかし」

「こいつ、弟を助けてくれたんだ。何か礼がしたいが、あいにく寝てるからな。なにがいい？」

「それでしたら、私達を運んでくださいませんか？力を使ってきたのですが、俺の力だけだと帰れませんし、家はここから遠いので・・・・」

「そんなんなら、おやすい御用だ！」

国王もといギルベルトは懐から笛を取り出すと空に向かって三度、鳴らしました。
すると馬車と、従者が走りながらやってきました。

「ギルベルト様！探したんですよ！戴冠パーティの主役がいないなんて！すぐにもど・・・その方々は？」

「ああ、ちょっとした知り合いだ。ヴェストが襲われたところを助けてもらった。
家まで送ってやる。いいな。」

「は、はい。」

そんなこんなで送ってもらえることになったロヴィーノとフェリシアーノでした。

国王登場（後書き）

やっぱ敬語って固いな。私は普段使わないので変だったらご指摘ください！！！

家に帰ると（前書き）

がんばったぜ！！ストックがあとちょっとなので更新がもっと遅くなる可能性大です。

家に帰ると

馬車の中で目が覚めたルートヴィッヒ（ルート）とフェリシアーノは、お互い存分に話し合っていました。

「へえ～あれって家出だったんだ～」

「む、昔の傷をほじくり返さないでくれ。俺だってもっと土地感があれば」

「俺はてっきり迷子になったのかな～って」

「うううぅ～」

「ケッセセセセ！さすがのルートも幼馴染みの前では形無しだな！」

「兄さん、フェリシアーノ達を送ったら、王宮に帰るんだろ？いいのか？ローデリヒが鬼の形相で待ってるぞ。」

「ってげぇ！！！そ、そうだった。俺、戴冠パーティ抜け出して来たんだった。やっべぇ！う～ん、まず確実に明日の朝飯は無いなぁ・・・・」

「それだけですめばいい方だ。兄さん、前抜け出した時はさらに罰とお叱りをうけていただろう。」

「あ～そうだった。う～戻りたくないな」

「まったく抜け出す時は時と場合を考えろとあれほど言っていた

のに・・・・はあ～。」

「う～ん、いったいどうすれば・・・・・あ！ああ、その手があるじゃないか！やっぱ俺様超あったまいい！」

「なんだ、急に」

「つまりな、今夜はヴァルカス家に泊めてもらえば良いんだよ！で、見つかったら帰る、と。」

「しかしそんなに長くお世話になるわけにもいかんだろう。せめて二日三日なら良いと思うんだが・・・・」

「え～構わないよ。」

「い、いいのか？」

「うん～お爺ちゃんが良いっていったらだけどね～」

「それなら問題ない。俺はヴァルカス爺と面識あるからな。」

「兄さん、そうだったのか！？」

「先代(おやじ)国王と会ってるのを何回も見たし、実際に言葉を交わしたことも何回かある。」

「それなら、そうと初めから言ってくれ！」

「ギ、ギルベルト様。王宮にお帰りになられないのですか？」

従者は怯えた様子でギルベルトに問いました。

「ああ、たぶん、一週間ぐらいかえんないな」

「そんな！そ、それでは私の首が危うくなってしまいます！」

「あ～なら、ローデリヒにはこう言っておけ。『ギルベルト様は、戴冠の旨を大英雄に伝えに行かれた。その時に出会った英雄の孫と大変意気投合され、しばらくこの国の未来について話し合うため、英雄の家にお泊まりされるそうだ』　ってな！」

「し、しかし、」

「嫌なら今すぐこの仕事を辞めてもらっていいんだぜぇ？それくらいの権限、おれは持ってる。」

「わ、わかりました。」

「いよっし！」

「あ、もう着くよ。」

「そうか。あ、じゃあな！よろしく頼むぜ！ケセセセセセセセセ！！！！！！」

「遅くなったよ～おじいちゃん。今日はお客さんがいるんだ。」

「ん、ああ、誰だ？ッて！ああ、ギルの小僧じゃね～か。大きくなったな～」

「おひさしぶりです。」

「で、そっちのむきむきは？」

「紹介します。これは俺の弟で、ルートヴィッヒって言います。ルートでいいです。ほら、ヴェストも挨拶しろ！」

「あ、」

ルートの目が点になっていました。それもそのはず。英雄とも謳われた人が目の前で、半裸になって酒を飲んでいるのです。驚かぬはずがありません。

「、ルートヴィッヒです。以後お見知りおきを。」

即座に表情を作りかえる、王族お得意の技を炸裂させ、ルートは陰でギルベルトに聞きました

「兄さん、あれが　ほ　ん　と　う　に　大英雄なのか？俺にはただの酔っぱらいにしか見えないんだが。」

「な～に言ってるんだよ！正真正銘のヴァルカス殿じゃね～か！」

「そう、なのか。」

ルートは内心とてもヴァルカスを尊敬していたので、とてもがっかり。

「ピィッア出来たよ～」

フェリシアーノの掛け声で、晩ご飯が始まりました。

「うむ、フェリシアーノがつくる料理は美味いな。」

「王宮では毒味係が食べた冷え切ったもんしか出てこね～からな。お前には珍しいか。」

「ああ、うむ。」

「やっぱこうしてみると、ルートって本当に王子なんだね～」

「当たり前だろちくしょ～。俺は初めて会った時から薄々気づいてたぞ」

「え～そうなの～？」

「あ～食った食った。ご馳走様。」

「俺はもう寝るぞ。」

「あ、じゃあ、俺たちも寝させてもらいます。ルート、ほら、お兄様の隣で寝ろ寝ろお！」

「いい。俺は床で寝る。」

「そんなぁ～」

「静かにしろ。兄さん。」

そんなこんなで皆、眠りました。

家に帰ると（後書き）

最後の方が誰が喋ってるか解りづらいとおもいます。すいません。

英雄の喪失（前書き）

後半が読みにくいでしょうか・・・。

英雄の喪失

深夜。
ヴァルカスは一人、目を覚ました。

「この予感・・・・。やはり動き始めたか。今ならまだ、、抑えられる。しょうがない。こんなかわいい孫達をおいていくのは気が引けるなあ～。石についても全然教えられてねえってのに。まあ、いいか。なんかあったら『あの』本がある。」

そう呟くと旅の準備を済ませ、家からそうっと抜け出した。

「おはよーってあれ？おじいちゃんいないや。またどっかいったのかな～」
「いつものことだろ。」
おじいちゃんはちょくちょくいなくなることがあったので双子は気にとめませんでしたが一つだけ気になることがありました。
「でも、いつもは書き置きとか合ったり、俺らにひとこと行ってから出たりするのにね～変なの～」
「ま、いつも通りに帰ってくるだろ。」
「それにしても今日はすごい雨だね～」
「ふぁ～ああ、フェリシアーノちゃんたちおはよう。」
ギルベルトが起きてきました。続いてルートも
「兄さん、もう少し国王としての威厳を持ってくれ・・・。」
寝起きのぼさぼさヘアーの兄をしかりながら起きてきました。
「ヴァルガス爺は？」

「それが、またどっか行っちゃったみたいなんだ～」
「そうか・・・。さて、俺らはもう帰るぞ。」
「えええ～～～～～！！！嫌だ！あのお坊ちゃんの説教食らうのはもう少し後でもいいんじゃないか？」
「1日ぐらいなら心配もないだろうが、日にちが伸びれば伸びるほどローデリヒのお説教も長くなるぞ。いいのか？」
「早く帰った方がいいってことか・・」
「というわけで、俺らは一旦王宮に帰る。泊めてくれてありがとうな。」
「うん！」
「暇なときにはまた来てくれ。」
「じゃあな！」
こうしてルートたちは嵐の中帰って行きました。

英雄の喪失（後書き）

今日は三国同盟が締結された日らしいので、菊が出るとこまでがんばって書いてみようっ！！

流れ着く、黒髪の者（前書き）

今回菊登場！三国同盟締結した日でテンションマックスだぜフゥ～！！（（殴

はい、落ち着きました。

流れ着く、黒髪の者

「はあ・・・。おじいちゃん本当にどこ行っちゃったんだろう？今までこんなに長く家あけたことなんてなかったのに　・・・・。」

おじいちゃんがいなくなってから一週間。ロヴィーノはここぞとばかりに首都のアントーニョ兄ちゃんのところへ遊びに行き（正確に言えば押しかけ）一人留守番を任されたフェリシアーノはしかたなしに近くの海岸でも行こうと考えた。

「だいたいもう5日も経ってるよ！小さい頃からいつもこうなんだから・・・。兄ちゃん早く帰ってこないかなー」

浜辺につくと何かが横たわっていました。遠目からはなかなかわからなかったのですが

「あれは・・・ひっ人！？」

慌てて駆け寄り、抱き上げると、そのひとは闇夜のような黒い髪に、整った美しい顔・・・は苦痛で歪められていました。

「どうしたの！？大丈夫！？」

「う、ああ・・・。」

呻いただけで目を覚まさないその人。

フェリシアーノはどうするか考えた後、

「これが非常事態ってやつだよね！」

リングを外した。

「力第三章・・・守りの伝・・・全回復！！」

光が一瞬あたりを包むと、黒髪のその人は目を開けた。

「小梅！ヨンス！？あ、あれ・・・・？こ、此処は何処ですか？」

「よかったー気づいて！」

「あ、あなたがお助け下さったのですか？誠に、ありがとうございま・・・げほっげほ！」「あーまだ無理しちゃだめだって！ここで倒れてたから助けただけだよ」

「しかし、急に体が軽く・・・。どのようにして？」

「あ、俺なんかわからないけど、変な力持ってるんだ～」

そこにあった木を浮かせてみると、その人は

「そ、その力は・・・神仙！？何故貴方が！！」

「え？おじいちゃんも兄ちゃんも使えるよ？」

「こっこの国では誰もが貴方のような力を持っているのですか？！」

「ううん～俺たちだけ～」

なぜそんなことを聞くのかと聞くとその人は居住まいを正し、

「本来ならば私から名乗るべきでした。私は小龍国皇太子、本田菊と申します。本国でしたら、私を助けてくれたお礼に何かできたのですが・・・。生憎ここは異国のようです。右も左もわかりません。厚かましいとは思うのですが、どこか雨風をしのげる場所を世話しては下さいませんか？」

「だったら家に泊まりなよ！」

「いいのですか！？すいません、大変恐縮ですがそうさせていただきます。」

二人はフェリシアーノの家に向かって歩き出した。

流れ着く、黒髪の者（後書き）

しかしフェリは人を招きすぎだと思う。何とか間にあった・・・。
菊の言ってた神仙ってやつとか、小龍国は次回詳しく。

小梅＝台湾
ヨンス＝韓国

連合国は・・・出せるかなー出せるといいな～
イヴァン様は出てきます。
眉毛とか髭は分かりません。
出して欲しい人などいたら、リクエストお願いします！

東方の島国（前書き）

設定は全く訳分かりませんね・・・。

東方の島国

「小狼国ってどんな国なの～？聞いたこと無いんだけど～」

「それは・・・当たり前でしょう。何せ我が国は他の国との交流がほとんど無い上に島国、確か数年前に商人が来ただけですからご存じないのも当然でしょう。」

「じゃあ何でここの海岸に倒れてたの？」

「それは・・・。ここから先は国家機密になりますから、ほかの方には口外無用です。
我が国を治めていらっしゃる父上王耀様は、そろそろ国の変遷を考えています。そのため、私に他の国との友好関係を結ばせるため、国から出し、ほかの国々を視察するためにきたのです。」

「へえ～すごいね～」

「来たのですが・・・・。途中で嵐に遭ってしまい、遭難して、運良く流れ着いたのがここの海岸だったんです。しかも何かあったときのためと国の宝、『龍ノ珠』まで持ち出して・・・・。誠に申し訳ありません。このままだと国へ帰れませんっ！！」

「え～大変だね～で、その龍ノ珠って何？」

「あ、これなのですが、」

それ（・・）はとてもきれいなの輝きを持った蒼い宝石でした。

（この形どこかで見たなあ～う～ん、あ！）

「俺これの色違い持ってるよ！？」

「なっ！！これは小狼の国建国当初から我が国に伝えられてきた物です、何故貴方が持っているのですか！」

「お、おじいちゃんから貰ったんだけど～」

「そうですか・・・。それはどのような能力を持っているのですか？」

「え？」

「例えばこの玉、不老の力を持っています。そのため、我が一族は老いることなく父は今年でざっと四千年ぐらいの歳です。さらに、水を操ることができるのです。」

「す、すごい・・・。」

「あ、ちなみに私は二千歳ぐらいですよ。」

「もうお爺さんだね～」

「はあ・・・。腰痛が酷くて大変なんですよ。」

「で、さっき言ってた」

「神仙のことですか。神仙は父のみ使えるとされている不思議な力

です。病気を一瞬で治したり、さっき貴方がやっていたように物を浮かせたりできます。」

「俺のはじいちゃんからの遺伝なんだけど」」

「何者ですかその人は・・・。で、父が持っているので、私もちょっとまねできるんですが、まあ簡単な術が使える程度ですよ。」

「へえ～あ、見えてきた、あれが俺の家だよ。」

「すいません、重ね重ねお世話になります・」

東方の島国（後書き）

次回@親分子分のターン
ちなみに菊が使える能力は回復（ヒール）です。
２０００歳設定のおじいちゃん。
王耀口頭のみになるかもしれない・・・。出すかも知れない・・・・・。
どうしようか迷い中です。

子分兼兄（前書き）

親分登場！しかし連合メンバーより先に出てきちゃったよ。
あああああ連合メンバーどうしよう！

子分兼兄

「そいでな、その国がめっちゃすごかってん！いたるところに黄金があってでっかい島なのに誰も行かんかってん！」

誰かこの酔っぱらいをどうにかしてくれ・・・。

そうため息をついた子分（ロヴィーノ）。

カリエド商会はこの国一番の商会で、そこの元帥がこのよっぱらいだと思うとなんだかやるせなさを感じる。

現国王もこの男と仲がよく、お忍びで町に降りるときよく彼の家に泊まっているらしい。隣国にもよく行っていてどうやらそこの国王とも仲がいいらしい。

酒場のマスターも　（最近の若いのは・・・。と半分あきれ顔だ。ここにいる男が『アントーニョ・ヘルナンデス・カリエド』だと知ったらどんな顔をするだろう。きっとサインをせがむのではないか。

酔いが回ったのかアントーニョは今は自分が行った国について話している。しかし黄金がそんなざくざくとれて鎖国してる国なんて（あるわけねー）

「そいでな～その国の皇帝がめっちゃ若いねんお幾つですかてお付きの者にきいたら４０００歳やて。

よくよく聞いたらなんか不思議な石の力で建国からず～～～～～っとおるらしい。で、それを国民がみんな信じてるんや！びっくりしたで。」

「はいはい。」
どうせ酔っぱらいの戯れ言だろうと軽く聞き流す。

「なんか皇帝にはあわれへんかったけど皇太子には会えたんや。なんやごっつやさしそうなひとでな、めっちゃきれいやってん。こう言うと何やけど神々しいっていうか・・・。黒髪黒い目の人なら珍しいけどこの国にもおるやろ？でもその人は違う。吸い込まれそうって言うか、真っ暗な夜みたいな漆黒の瞳やねん。長く生きてるって話も信じられる感じやったなあ。」

「へえ～おいトーニョ、もうそのぐらいにしておけ。」

「ええ～ええやん。」

「よくねえよ。おまえ飲みすぎると暴れ出すだろ！はいはい、立った立った。」

「ほいじゃ～な、マスター、おおきに～」

お金を置いて店を出る。マスター相当変な顔してたな。

子分兼兄（後書き）

関西弁って難し一！親分の話は東方見聞，録を参考にしました。行ったのは小狼国。分からない人は前の編を見てみよう！

とある、情報（前書き）

間が開いてしまった・・・・・・・・・・・・。

とある、情報

「うう・・・。アルトゥロめ・・・。今度会ったらただじゃおかへんで・・・。」

べろんべろんに酔ったアントーニョをせおい、いつもの所へ行く。酔っぱらってるからすられないといいが。

「よう。最近はどうだ？」

「ロヴィか・・・。まあまあだ。情報が入ってくるにはくるんだが、どれも信憑性に欠けてな～」

知り合いの情報屋だ。いまはある情報の捜査を頼んでるがあまり芳しくないらしい。

「そうそう、お前のじいちゃん、残念だったな。」

「？なんだ？」

「聞いてねえのか。なんか、こっからすごい北にあるところで死んだらしい。」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・え？

「その話・・・・。本当か・・・・・？」

「いや、俺も小耳に挟んだだけだから詳しくはしらねえが・・・・。」

「その話！詳しく聞かせろ！！！！」

「い、いや・・・。」

無理矢理聞き出した情報によるとその（・・）筋の人にとっては結構有名な話で、世間の人たちの噂にもなっている。出所は分からないらしい。

「この話は」
「分かってるよ。お前の弟の耳に入らないように、だろ？」
「ああ、頼んだぞ。」
あいつにこの話をしたら最後、たぶん、俺みたいに冷静ではいられないだろう。小さいときからいつも冷静でいることをお爺ちゃんから教わった。

「と、とりあえず家に帰る。」
のんびりぐーすか寝てるアントーニョを背負い、また歩き出した。

とある、情報（後書き）

ちなみに私の小説の中でもアーサーと親分は因縁の中です。
海を渡り覇権を握っていた親分に忍び寄る海賊の陰・・・・。という物語があったんですが、今のところ書く予定はないんです。どうしようかな。

家に帰ると（前書き）

ロヴィと菊が出会います。
何度も言いますが本家様との関係は一切ありません。

家に帰ると

「ふふふ・・・。しかしこんな甘いお方もいるんですねえ。遭難した見ず知らずの私を泊めて下さるなんて」

ぞわり、全身の毛が逆立つ。

知らない声。

ここは自分の家のはずなのに中から知らない奴の声がする。

（そ、そんなはずはねえ。フェリシアーノが中にいるはずなのに・・・。もしや！）

体制を整え、息と気配を殺し、背負っているアントーニョを地面において中へ突撃する！

そこには

黒髪黒い目の優しそうな風貌の男がいた。傍には弟のフェリシアーノが横たわっていて・・・。

殺気を全開にして近づく。

「お前・・・。フェリシアーノに何をした？」

「おやこれはこれは。私は決して怪しいものではありませんよ。」

「嘘付け！だいたい何で人ん家（ち）、に・・・・」

よくよく見てみるとフェリシアーノは幸せそうな顔をして眠っているだけでした。

（だが気は抜けねえ・・・。）

目の前の相手は自分の出した殺気に反応するどころか、そのすべてを自然体で軽く受け流しているだけ。

（このままでは負ける！）

そう思い、相手に殴りかかる！

「おやおや、いきなり殴りかかってきては困ります、よっと」

あろう事か自分の拳を受け止めた。

「お前・・・。何者だ？」

「ああ、申し遅れましたね。私は小狼国皇太子本田菊と申します。」

「小狼国・・・。」

「お耳に挟まれたことはないかと思います。何せ今我が国は鎖国してますから。」

「いや・・・。」

聞いたことはあった。というか、今しがたあいつの口から延々と聞いていた国の話の中に、たしかそんな名前の国が・・・。

がたっ

玄関の前にほったらかしになっていたアントーニョが起きた音だと思った。キイ、と音を立てて扉が開けられると、そこでアントーニョは目を見開いて固まってしまった。

「そんなはずはあらへんやろ・・・。なんで菊様がここにおるん？」

「あ、アントーニョ、やっぱりこいつ、お前が言ってた『本田菊』

なのか？」

「ちょ！ロヴィ！頭（ず）が高いて！」

慌てて頭を押さえてくる。

「いえいえ、わたしはたまたまここの海岸で遭難してしまって、フェリシアーノ君に助けられたんですよ。」

「えええええ！！！！」

「ていうか、二人とも今日家に泊まるのか？」

そう聞くと

「私は遭難して助けられた身ですからそうするのがいいかと・・・。」

「泊まるで～」

「そ、そうか・・・。」

詳しい話はまた明日フェリに聞こうと決めたロヴィだった。

家に帰ると（後書き）

本家様のハロウィーンが・・・。はあはあ
遅れてしまい申し訳ありません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2524v/

新しい英雄とその仲間達

2011年11月4日17時21分発行